

| 乳房再建

形成外科では乳がんの摘出手術後に生じる乳房の欠損・変形に対して、人工乳房または自家組織を用いた乳房再建手術を行っています。

それぞれの乳房再建手術の特徴

○人工乳房による乳房再建

手術時間、入院期間が短いため、患者さんに大きな負担をかけることなく乳房再建を行うことが可能です。

人工物であるため、感染、破損の危険性があり、同一の人工乳房を永久に体内に留置しておくことはできません。

また、人工乳房の形はだいたい決まっているため、非手術側の乳房との間に左右差を生じる可能性があります。

○自家組織による乳房再建

人工乳房による再建手術に比べると、手術時間、入院期間は長くなります。

また、乳房再建に用いる組織を患者さんの体の他の部分から採取するため、乳房とは異なる部位に傷あとが残ります。

手術に際して乳房の大きさ、形態を調整しやすいこと、体によく馴染むこと（体が痩せれば再建乳房も痩せ、体が太れば再建乳房も太ります）、耐久性があることが自家組織の利点です。

自家組織による乳房再建について

○下腹部の組織を用いる方法

有茎腹直筋皮弁法 (pedicled TRAM flap) と遊離下腹部皮弁法 (深下腹壁動静脈穿通枝皮弁法 Free DIEP flap、または、Free Muscle-Sparing TRAM flap) があります。

前者の有茎腹直筋皮弁法は、移植組織が脱落する可能性がほとんど無いため安全に手術を行うことができますが、乳房の形態、ボリュームの調整が難しいことがあります。また、片側の腹直筋を切除しなくてはなりません。

後者の遊離皮弁による乳房再建では、乳房の形態やボリュームを調整しやすいという利点がありま

すが、マイクロサージャリーという顕微鏡を用いた高度な技術を要する手術が必要になります。また、有茎腹直筋皮弁法に比べると腹直筋の犠牲を少なくすることが可能です。(Free DIEP flap は腹直筋を完全に温存することができますが、Free MS TRAM flap では腹直筋を一部切除する必要があります。どちらの方法を行うかは、術前に血管造影 CT を撮影したうえで判断することになります。)遊離皮弁法は有茎腹直筋皮弁法に比べ、移植組織の壊死、脱落を生じる可能性が高くなります。

○背部の組織を用いる方法

乳房温存療法後に生じた乳房の変形、部分欠損に対しては、広背筋皮弁を用いて再建手術を行うことがあります。

乳房再建方法の比較

	人工乳房	自家組織
入院期間	約 1 週間	10～14日
手術時間	2 時間	8～12時間
耐久性	約10年 (個人差あり)	ほぼ永久
自然さ	個人の形態に合わせた再建ができない可能性あり	自然な形態、やわらかさを再現しやすい

その他

- 乳がん術後の乳房変形、欠損(乳がん術後後遺症)は、健康保険適応疾患です。
- 輪乳頭欠損、変形に対する再建手術も行っています。
- 乳がんとは関係のない陥没乳頭(健康保険適応疾患)に対しても手術治療を行っています。
- 乳がん術後に生じたリンパ浮腫に対する手術治療も行っています。